

「まえがき」

邪馬台国はどこにあったのか。この問いに関する論争はもう出尽くしたかの感があります。邪馬台国については江戸時代からいろいろな説が提出されました。戦後の古代史ブームの時代にもさまざまな説が出され、日本国中、邪馬台国の候補地だらけのようになりました。しかし、現在有力な説は邪馬台国が九州にあったとする九州説と、奈良県の纏向とその周辺にあったとする近畿説に集約されたと言っていいと思います。しかし、結局近畿説にしても九州説にしても、完全に納得のいく説明ができたとは言えないのが現状です。

そしてその間、纏向遺跡の発掘調査が進む過程で、めぼしい遺跡や遺物が発掘されるたび、新聞に「これは邪馬台国に関係があるのでは」とか、「卑弥呼女王に関係あるのでは」などという記事が掲載され、なんとなく近畿説が有力であるかのような印象が作られているこの頃です。こういった「なんとなく近畿説が有力なのは」というムードでこの論争が下火になるのは、邪馬台国の研究を続けてきたものとして残念でなりません。やはり、きちんと合理的に、論理的に、邪馬台国がどこにあったのかの結論を出すべきだと思います。

弥生時代とはどういう時代か、そして、その時代に生まれた邪馬台国とはどういう国かを、基本資料を整理しなおして改めて考察すると、実は議論の余地のないほどはっきりと邪馬台国の姿が見えて来るように感じています。

そこで、小論では、今まで出尽くした感のある資料をもう一度見直し、整理し、論理的かつ客観的に推論を進めてみることによって、何が見えるのかを明らかにしてみたいと思います。

なお、この論考の内容は、私が以前自費出版した「難民が作った国『倭国』」を、新しい材料も加えて再度整理したものであることを、あらかじめお断りしておきます。

難民の作った国「邪馬台国」その1 —弥生人は渡来人だった—

「弥生人の渡来による日本列島の人口増加」

最初に邪馬台国の考察を始める前に、邪馬台国が生まれた弥生時代とはどういう時代だったのかを考察しておくことが重要です。なぜならば、邪馬台国は弥生時代の日本列島に存在した国であり、その時代の周辺の状況と無関係に存在することはできないと考えるからです。そして邪馬台国がどうして生まれたのか、なぜ当時の中国にあった魏という国に使いを送り「親魏倭王」という称号をもらうこととなったのか。またその事件がなぜ歴史に書き残されたのか。そしてその後、邪馬台国はどうなったと考えられるのか。こういった問いはすべて弥生時代の日本列島で何が起きていたのか、そして、日本列島を取り巻く朝鮮半島の状況や、中国の政治状況がどうなっていたのか、との問題と関連なしに説明できないと考えられるからです。

日本列島の弥生時代を考えるときに、出発点とすべきデータがあります。それは縄文時代の研究者として知られる小山修三氏が作られた縄文時代から弥生時代、土師器時代までの日本列島の人口の推移を試算した表です。

(表1) 地域別、時代別人口 (小山1984より著者が作成)

	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	弥生	土師器
東北	2.0	19.2	46.7	43.8	39.5	33.4	228.6
関東	9.7	42.8	95.4	51.6	7.7	99.0	943.3
北陸	0.4	4.2	24.6	15.7	5.1	20.7	491.8
中部	3.0	25.3	71.9	22.0	6.0	84.2	289.7
東海	2.2	5.0	13.2	7.6	6.6	55.3	298.7
近畿	0.3	1.7	2.8	4.4	2.1	108.3	1217.3
中国	0.4	1.3	1.2	2.4	2.0	58.8	839.4

四国	0.2	0.4	0.2	2.7	0.5	30.1	320.6
九州	1.9	5.6	5.3	10.1	6.3	105.1	710.4
全国	20.1	105.5	261.3	160.3	75.8	594.9	5399.8

(表2) 人口増加率(%) (小山1984より著者が作成)

	縄文早期～ 前期	縄文前期～ 中期	縄文中期～ 後期	縄文後期～ 晩期	縄文晩期～ 弥生	弥生～土師 器
東北	0.08	0.11	-0.01	-0.03	-0.02	0.21
関東	0.05	0.10	-0.06	-0.46	0.24	0.22
北陸	0.08	0.22	-0.04	-0.27	0.13	0.30
中部	0.07	0.13	-0.12	-0.31	0.25	0.12
東海	0.03	0.12	-0.05	-0.03	0.20	0.16
近畿	0.06	0.06	0.04	-0.18	0.37	0.23
中国	0.04	-0.01	0.07	-0.04	0.32	0.25
四国	0.02	-0.08	0.26	-0.41	0.38	0.23
九州	0.04	-0.01	0.06	-0.11	0.26	0.18
全国	0.06	0.11	-0.05	-0.18	0.19	0.21

小山修三氏は、縄文時代から弥生時代、土師器時代までの遺跡分布を精査し、一遺跡あたりの人口を推計し、そこから、どの時代、どの地域にどのくらいの人口があったかを計算し、縄文時代早期、前期、中期、後期、晩期、および弥生時代、土師器時代の日本列島の人口を地域ごとに算出したのです。小山氏は一遺跡あたりの人口を決めるデータとして土師器が作られた3世紀から13世紀までの1000年のほぼ中間点に当たる奈良時代(8世紀中ごろ)の関東地方の人口推計と、その時代の土師器を出土した関東の遺跡数を使って土師器時代の一遺跡あたりの人口を約170人としました。

この奈良時代の人口データは沢田吾一氏が「弘仁式」「延喜式」の主税帳から求めた人口推計です。また関東地方の縄文、弥生、土師時代の遺跡の一遺跡あたりの人口比を求め各時代の一遺跡あたりの人口を産出しました。そして得た一遺跡あたりの人口は縄文早期が 8.5 人、縄文中期、後期、晩期は 24 人、弥生時代は 57 人としました。こうして求めた一遺跡あたりの人口に各時代の遺跡数を懸けて総人口を計算したのです。(小山 1984)

小山氏自身も言っているとおり、この計算はある論理に基づいた仮説です。推計には誤差が生じる可能性は否定できません。しかしその仮説は合理的であり、日本列島の古代の人口推移を考える上ではきわめて示唆に富んだものといえると思います。小山氏の試算は 1975 年までに集めた資料に基づいたものであるため、最新の資料を使えば若干試算値は変わる可能性はありますが、結論は大きくは変わらないと思われます。特に縄文から弥生にかけての人口の地域的分布の変化、すなわち縄文時代には東日本から東北にかけて人口密度が高く、近畿や中・四国の人口密度が低いのに対し、弥生時代になると逆に東北地方の人口密度は低く、関東地方、および近畿以西の人口密度が高くなること、また、縄文中期より縄文後期、縄文晩期の人口が少なくなること、弥生時代になって急激に人口が増加することなども動かない結論であろうと思われます。

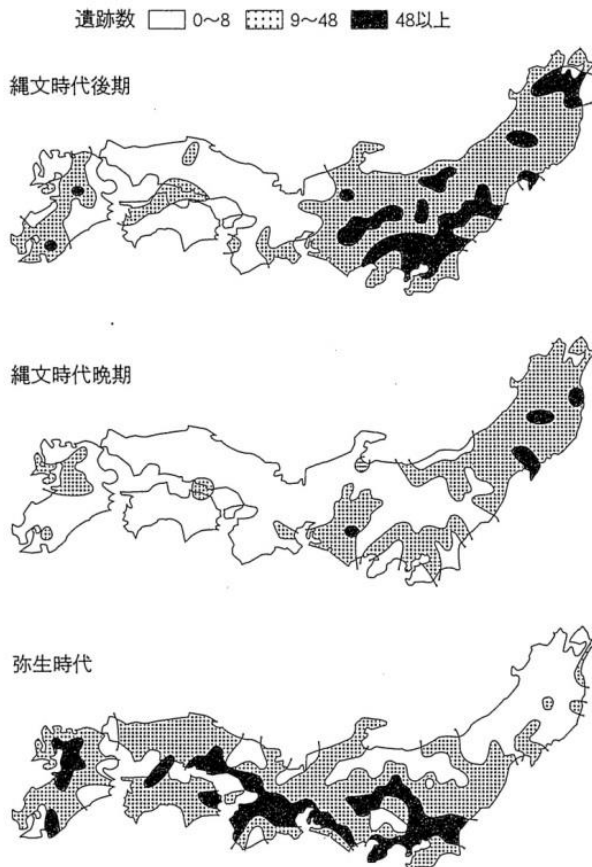
小山氏の推計の前提となっている各時代の絶対年代にも問題がないとは言えません。特に縄文時代の晩期の絶対年代を何年ごろと考えるかについては諸説あります。弥生時代の始まりは従来紀元前 300~400 年というのが定説でしたが、近年紀元前 800 ころ年という説も出されています。また弥生時代の終わりについても 3 世紀末か中ごろかで議論があります。

小山氏はその著「縄文時代」(1984)では「C14 年代のサンプルを時期ごとにグループ分けし、その年代の平均(および標準偏差値)を取って各時期の中央地を求めた」「その結果縄文時代早期 8100、前期 5200、中期 4300、後期 3300、晩期 2900、および

弥生時代 1800 年前という時点を決めた」としています。

図版— 1 縄文時代から弥生時代までの人口分布（小山 1984）

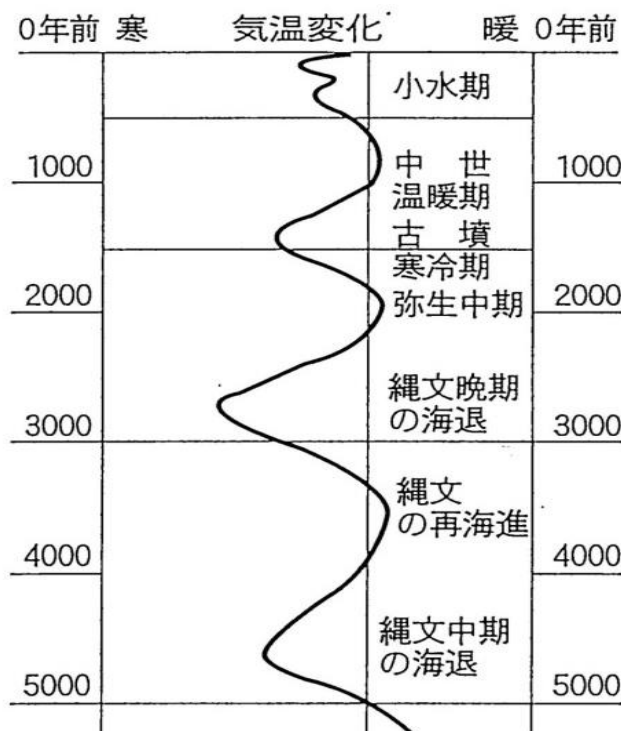
図版1 縄文時代から弥生時代までの遺跡分布図



これらの試算の中で最も注目すべきは縄文後期、縄文晩期の人口がその前の時期の縄文中期、縄文後期より減少したということです。特に縄文晩期の人口は大きく減少し、縄文後期の人口のほぼ半分になったとされています。つまり縄文晩期の日本列島の人口は、縄文後期の人口 16 万人から、7 万 5000 人程度に減少していたと思われることです。

「縄文晩期は気温が低い時代だった」

縄文後期、晩期の人口減少の理由として考えられるのが小山氏も指摘している気候の寒冷化です。現代は気候の温暖化が大問題になっていますが、研究者によれば、地球の気温は、長い年月の間に、寒冷化したり温暖化したりしてきましたのです。9000年以上前の氷河期には、今より4度も平均気温が低い時代がありました。その後、地球の気温は上昇し、6000年位前には今より2度ほど高い時代もありました。2度というと大した差ではないように感じますが、これは植生が全く変わっ



てしまうくらいの劇的な変化です。その後、4800年前後に現在より2度低くなった後、3500年前にはまた上昇し、現代並みの気温になりました。その後再び気温は下がり始め、2900年ほど前、すなわち紀元前900年ごろに、今より3度ほど気温が低い時代がやってきました。(安田喜憲 1992)

この時期がちょうど日本列島の縄文時代の晩期に当たります。

この気温の寒冷化が日本列島に

おいても植生の変化を引き起こし、ひいては縄文人たちの食料の欠乏を招いたものと思われます。そして食糧の欠乏は縄文人の人口を減少させる大きな要因になったに違いありません。また、この時期日本列島におそらく朝鮮半島経由で渡来する人々が増えてきました。弥生人の渡来です。弥生人は最初、北九州にその拠点を作りますが、その時、新たな疫病も持ち込んだ可能性があります。その疫病によって縄文人の人口の減少が加速された可能性も否定できないようです。

「埴原和郎氏の視点」

しかし、人口の激減した日本列島に異変が起きます。小山氏の推計では縄文晩期に7万5000人だった日本列島の人口は、約1100年後の弥生時代には60万人近い数になっています。急激に人口が増えていったのです。

小山氏の人口推定値から埴原和郎氏の人類的な視点が生まれます。一言で埴原氏の考えを一言で要約すれば「縄文晩期から弥生時代にかけての人口の増加は大量の渡来人によるものではないか」ということです。埴原氏はその著書「日本人の成り立ち」(1995)の中でこう言っています。

「小山の推定値で見ると、縄文時代全体を通して人口増加率(年率)は、一部の例外を除いて0.1%以下またはマイナス成長だが、縄文時代から弥生時代にかけての増加率は東日本で0.2%前後、西日本では0.3%から0.4%ほどに達した。その結果、弥生時代の全国の人口は約60万、古墳時代には540万になったと推定される」

「縄文時代末期から古墳時代にいたる1000年足らずの間に7万5000から540万に増加したとすれば、その年増加率は0.4%以上となり、この時代としては異常な高率と考へざるを得ない」

「初期段階の農耕民がどれほどの人口増加率を示すかというデータは、何人かの人口学者によって研究されている。たとえばマッケヴェディとジョーンズによると、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、アメリカの様々な地域で推定した結果、平均して0.04%という値が得られている」

「そうすると、小山の推定がほぼ正しいとみる限り、日本では何か特殊な原因があったのだろうと想像される。そして(中略)“特殊な原因”とは渡来人ではないかと思ひ当たる」(埴原1995)

そして、この考え方をモデル化して次のように言っています。

1. 大量の渡来人が来た時代を、弥生時代の開始期(紀元前3世紀)から初期歴史時代(7世紀)までの1000年間と考へる。

2. この期間の人口増加率（年率）を初期農耕民のデータから、安全を考えて、やや高めの0.2%とする

3. 小山の推定値から、弥生時代開始期の人口を7万5800、7世紀初めの人口を539万9800とする

4. 初期人口が年率0.2%の割合で1000年間にわたってXまで増加したとすれば、Xと7世紀初めの推定人口との差は、その間に渡来した人数の関数になるはずである。

5. ただし渡来した人々も子供を生み、人口増加に影響を及ぼすことを計算に入れる必要がある。

このモデルをもとに埴原氏は古墳時代の縄文人の末裔の人口を試算しています。埴原氏は小山氏の縄文末期の人口推計値7万5800人と、後期の人口推定値16万300人の二つの数字をもとに試算しています。小山氏の試算値やマッケヴェディらの増加率推定値にもかなりの誤差があると考えたといっています。さらに人口増加率を0.2%とした場合から0.4%とした場合まで試算する念の入れようです。そして、その試算結果は次の表のとおりです。

（表4）人口増加モデルによる縄文系・渡来系集団の推定人口

（埴原 1995 より引用）

初期人口値（人）	年増加率（%）	縄文系（人）	渡来系（人）	全体（人）
75,800	0.2	560,000	4,839,800	5,399,800
〃	0.3	1,522,485	3,877,315	〃
〃	0.4	4,138,540	1,261,260	〃
160,300	0.2	1,184,466	4,215,334	〃
〃	0.3	3,219,712	2,180,088	〃

この計算結果を見ると、埴原氏は小山氏が縄文晩期とした時期を弥生初期と置き換

え、土師器時代とした時期を古墳時代とし、その間は紀元前3世紀から7世紀までの1000年と考えたと思われます。この計算で人口増加率が0.2%のとき1000年後の土師器時代には縄文系の人々は56万人となり、その時代の総人口539万9800人から56万人を引いた483万9800人が弥生時代を通じて渡来した人々の末裔だということになります。これは全人口の89.6%になります。同じく人口増加率を0.3%とした場合には縄文系の人々は152万2485人となり渡来系の人々は387万7315人になる計算です。この場合でも全人口の71.8%になります。この試算によれば古墳時代に縄文系の人々が最も多くなる初期人口値5万7800人、人口増加率0.4%の場合でも、渡来系の人々は126万1260人となり総人口の23.4%を占めることになります。最も渡来人が多くなる場合は初期人口値5万7800人、人口増加率0.2%のケースですが、その場合、渡来人とその末裔は何と総人口の89.6%を占めることになるのです。

「埴原氏の試算の問題点」

しかし、実はこの計算には問題があります。先に説明したとおり、小山氏は縄文晩期を紀元前900年、土師器時代は8世紀前半と想定しているのです。従ってこのタイムスパンは1630年程度と見たものと思われます。埴原氏は縄文晩期を紀元前300年、古墳時代は7世紀としてその間を1000年と見て計算をしています。小山氏の想定通り縄文晩期と土師器時代の間を1630年とした場合とでは増加する人口は変わってくるのです。

そこで、小山氏のように縄文末期から土師器時代までを1630年程度とした場合、縄文人の末裔が何人になるかを試算しなおしてみると増加率が0.2%の場合は計算が成り立ちますが、人口増加率が0.3%以上では縄文人の末裔の人口が総人口をはるかに上回ってしまい成り立たなくなります。弥生時代の人口増加率を0.3%以上と想定することは小山氏の試算値と矛盾してしまいますので、人口増加率は0.2%以下だったと考えるべきです。

また、歴史人口学の第一人者、鬼頭宏氏は日本列島の人口推移を次のような表にまとめています。（鬼頭氏は現代までの人口推移表を作っていますが、ここでは江戸時代以降のデータは議論に関係ないため省きました）これによると奈良時代の人口は小山先生の推計よりさらに少なく 451 万 2000 人となっていますので、渡来系の人々の数は先の試算よりさらに少なくなってしまう。

（表 5）日本列島における人口増加（鬼頭 2000 に基づき著者が試算）

時代		時間差	人口	人口増加率
縄文（早期）	8100 年前		2 万人	
縄文（前期）	5200 年前	2900 年	10 万 5000 人	0.06%
縄文（中期）	4300 年前	900 年	26 万 1000 人	0.10%
縄文（後期）	3300 年前	1000 年	16 万人	-0.50%
縄文（晩期）	2900 年前	400 年	7 万 6000 人	-0.19%
弥生（中期）	1800 年前	1100 年	59 万 4000 人	0.19%
奈良時代（725 年）	1270 年前	530 年	451 万 2000 人	0.38%
平安初期（800 年）	1195 年前	75 年	550 万 6000 人	0.27%
平安前期（900 年）	1095 年前	175 年	644 万 1000 人	0.16%
平安末期（1150 年）	850 年前	245 年	683 万 6000 人	0.02%
慶長 5 年（1600 年）	395 年前	455 年	1226 万 5000 人	0.13%

この表 5 から日本の人口の推移をみると縄文時代早期から中期にかけての人口増加率は年率で 0.1% 以下、さらに晩期にかけては逆に人口は減少しています。縄文晩期から弥生時代にかけての人口増加率は 0.19%、弥生時代から奈良時代にかけての人口増加率は 0.38%、奈良時代から平安初期にかけての人口増加率は 0.27% となり、この時期に急激に人口が増加したことが分かります。平安時代初頭から平安時代の前期

にかけての人口増加率は 0.16%、さらに平安末期にかけての人口増加率は 0.02%と人口増加率は下がります。小山氏の試算は土師器時代(8世紀)までの推計でしたが、鬼頭氏はさらに平安時代以降も推計していますので、平安時代以降の人口の推移が見えるようになりました。それによると、弥生時代とその後の土師器時代(古墳時代から平安初期まで)だけが日本の古代の歴史の中で突出して人口が増えていることが分かります。そして、この時代を除いたほかの時代の人口増加率は 0.1%を大きく上回らないことも分かります。このことから、弥生時代から平安初期までの人口増加率が異常に高く、そのほかの時代の人口増加率が古代の日本列島での自然な人口増加率だったとしてもいいのかもしれませんが、しかし、弥生時代から平安初期までの人口増加率がほかの時代より高いのは事実ですが、この数字が異常だったと言い切るのには根拠が乏しいようにも思えます。

(表6) 東日本、西日本別人口増加率(鬼頭の試算をもとに著者が作成)

時代	年	東日本	西日本	全国
縄文早期	8100年前(紀元前6105年)			
縄文前期	5200年前(紀元前3205年)	0.06%	0.04%	0.06%
縄文中期	4300年前(紀元前2305年)	0.11%	0.00%	0.10%
縄文後期	3300年前(紀元前1305年)	-0.06%	0.07%	-0.05%
縄文晩期	2900年前(紀元前905年)	-0.19%	-0.15%	-0.19%
弥生時代	1800年前(195年)	0.14%	0.30%	0.19%
奈良時代	1270年前(725年)	0.36%	0.41%	0.38%
平安初期	1195年前(800年)	0.23%	0.29%	0.27%
平安前期	1095年前(900年)	0.38%	-0.04%	0.16%
平安末期	845年前(1150年)	0.04%	0.01%	0.02%
慶長5年	395年前(1600年)	0.09%	0.17%	0.13%

そこで鬼頭氏のデータをもっと細かく見るとある現象に気が付きます。この表6は人口増加率を東日本、西日本それぞれに著者が集計しなおしたのですが、これを見ると東日本と西日本の人口増加率には、時代によって差があることが分かります。奈良時代から平安初期まで東日本も西日本も人口増加率が高いのは全国の動きと同じですが、弥生時代の人口増加率は西日本が0.3%であるのに対し、東日本の増加率は0.14%と大きな差があるのです。つまり弥生時代には西日本では東日本では起きなかった桁違いの人口増加がおきているのです。

この数字を見ると埴原氏の言ったとおりこの時期に“特殊な要因“があったと考えるのが妥当であると思われます。その”特殊要因“とは渡来人の増加だと考えていいのではないのでしょうか。

また比較的人口が安定した平安初期から慶長時代までの人口増加率は0.17%になります。この時代も農業、漁業を主たる生業とした時代であり、大きな戦乱等で人口が極端に減少したということもなかったと思われますので、弥生時代の自然な人口増加率の参考としていいのではないかと思われます。また、弥生時代の東日本の人口増加率も0.14%であるのも渡来人の影響がなかった場合の人口増加率の目安としていいのではないかと思われます。

そこで自然な人口増加率を0.15%と仮定して、縄文末期に7万5千人だった縄文人の末裔が、その後順調に人口を増やしていった場合のシミュレーションをしてみます。その結果は約1100年後の弥生時代には縄文人の末裔は40万人弱になる計算です。ということは、弥生時代の人口59万5000人のうち、残りの19万5000人（総数の32.8%）は渡来した人々と、その末裔の人口だと考えざるを得ません。この渡来人とその末裔が弥生人だと考えられます。

また1630年後の土師器時代に縄文人の末裔は87万2000人強になる計算で総人口540万人のうちその差452万8000人（総数の83.9%）が渡来人とその末裔だったと

いう計算になります。この計算が妥当であるとすればかなりの数の渡来人が渡ってきたと考えざるを得ません。

では、土師器時代に渡来系の人々が 452 万 8000 人にもなるにはどのくらいの人々が渡ってきたと考えるべきでしょうか。どの時代にどれだけの人が渡ってきたかによって計算が違ってきますが、最小値と最大値を求めることはできます。

すなわち渡来人の数が最も少なくなるケースは縄文晩期にすべての渡来人が渡ってきてそれ以後は渡来がなかった場合です。人口増加率 0.15% で 1630 年間人口が増えたとすると当初の人口の 12 倍になりますので、渡来系の人々が 452 万 8000 人になるためには渡来した人はその 12 分の 137 万 7000 人ということになります。

また、1630 年間の約中央で渡来したと考えて計算すると、人口増加率 0.15% で 815 年あれば人口は 3 倍になりますので、渡来人は 150 万 9000 人になる計算になります。実際はすべての渡来人が初期や中期に一度期に渡ってきたわけではなく、弥生時代から奈良時代にかけて波状的に渡来したと考えられるので、もっと多くの人々が渡来した可能性もあります。少なくとも 150 万 9000 人以上の渡来人がいたのは間違いないと思われま。著者はこの数字の方が実際に起きたことに近いのではないかと考えています。

(表 7) 弥生時代、土師器時代の縄文系人口試算

	人口増加率	縄文系人口	渡来系人口	総人口	渡来系の比率
弥生時代	0.15%	400 千人	195 千人	595 千人	32.8%
土師器時代 (小山案)	0.15%	872 千人	4528 千人	5400 千人	83.9%
土師器時代 (鬼頭案)	0.15%	872 千人	3640 千人	4512 千人	80.7%

「渡来人が日本人のルーツ」

また、埴原氏は、独自に、縄文時代から現代まで、いろいろな時代の日本列島各地

域から出土した頭蓋骨を計測したデータを収集し、分析しました。その結果、それらの頭蓋骨は、大きく2つのグループに分類されることが明らかとなったのです。

グループ1：土井ヶ浜遺跡という山口県西部の遺跡で見つかった弥生時代人、また、近畿、西日本、北部九州で発見された古墳時代人、およびアイヌを除く現代日本人で渡来人の系統を引き継ぐグループです。

グループ2：関東地方で発見された弥生時代人、同じく関東や東日本、および南部九州で発見された古墳時代人、そして現代のアイヌの人々などで縄文人の系統を色濃く引き継ぐグループです。

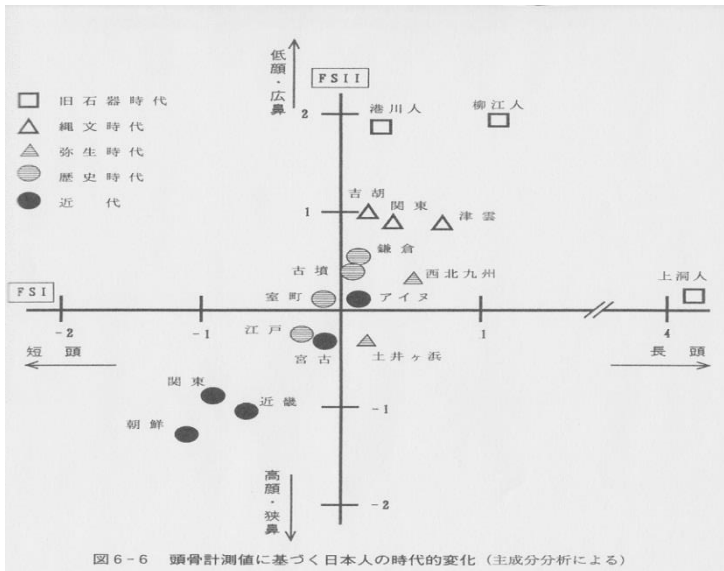
また、渡来人の系譜をひくと考えられる現代人についても、近畿、関東、東北と地域別にみると、東北の人々は頭が前後に長く（長頭）顔は扁平でいかつく（低顔）鼻が胡坐をかいている（広鼻）という特徴を持っているのに比べ、近畿の人々は頭は前後左右が同じ長さ、つまり頭蓋骨の断面が円に近く（短頭）顔は面長で（高顔）、鼻は高い（狭鼻）ということが分かったのです。そして、関東人はそれぞれの特徴が近畿人と東北人の中間にあるということも判明しました。つまり、日本列島に住んでいる人の頭蓋骨は、近畿から東に行くほどグループ1からグループ2へと徐々に変化していく傾向にあるのです。

このことから、埴原氏は、日本人の成り立ちについて、縄文人が日本列島に広く薄く分布していたところへ、弥生人が北九州や中国地方の日本海岸へ渡来し、その後、東へ東へとその居住地域を広げ、縄文人の末裔と徐々に混血していったのだと考えました。そのため、西日本人には弥生人の形質が強く残ったのに対し、関東地方の人は、それよりも、縄文人の特徴を残し、東北地方の人は、さらに縄文人の特徴を濃く残しているのだとしました。また九州南部も縄文人の特徴を色濃く残していることも渡来人が北九州に上陸したからだだと結論付けました。（埴原和郎1995・1996）

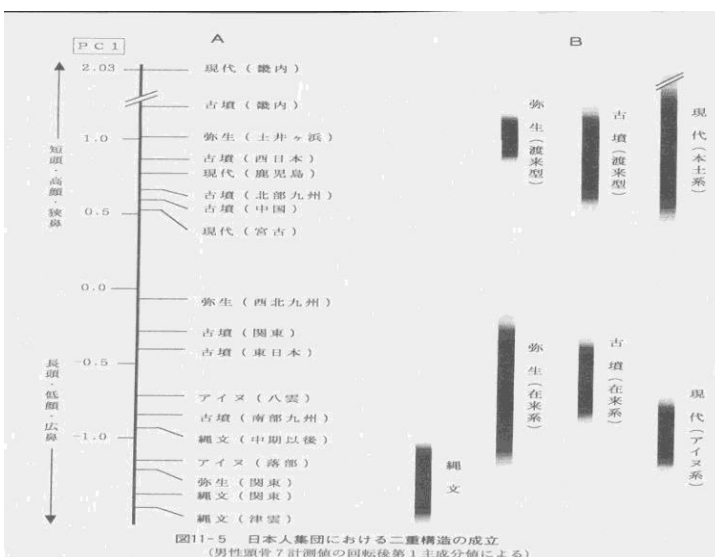
しかも、小山氏の研究から試算すると、弥生時代とその後に渡来してきた人々は、縄文人の末裔よりもはるかに人口が多かったと考えられるのですから、その渡来人が中

心になって、後の日本人が形成されていったと考えるのが妥当だといえるわけです。このように小山修三氏の研究と埴原和郎氏の研究により、日本人の成立の基本的構造が明解にされたといってもいいと思います。

(図版 2) 頭骨計測に基づく日本人の時代的变化 (埴原 1995 より引用)



(図版 3) 日本人集団における二重構造の成立 (埴原 1995 より引用)



そして弥生時代から土師器時代（奈良時代）までに渡来してきた人は150万人以上だったと考えられ、その人々の末裔は奈良時代の初めには総人口の80%程度までになっていたと考えられるのです。

「片山一道氏の視点」

一方、骨考古学の片山一道氏は縄文人の南方起源を唱えた埴原氏の説を批判して「いささかなりとも論理的に考えるなら、旧石器時代人が縄文人に変わり、新石器時代に続いたのだろう、と考えるのが理にかなう。縄文列島に大勢の人が押し寄せてきたなどとは考えにくい。もしそうなら、島国となったわけだから、かなりの渡海手段を想定しなければならない。そんな技術があったとは到底思えない」（片山 2015）としています。縄文人は日本海を渡れなかっただろうと考えているようです。しかし、考古学の森浩一氏によれば日本列島が縄文時代であった1万年前頃のウラジオストック、ナホトカの周辺の遺跡から島根県隠岐の島と秋田県男鹿半島産の黒曜石が発見されているとのことです。（森 1989）そうであればこの黒曜石は誰かが海を越えて運んだものとしか考えられません。これは間違いなく縄文時代に日本列島から大陸に渡っていった人がいた証拠です。海を越える技術はあったのです。黒曜石の海を越えた移動から言えることは縄文時代にも日本海を越えた行き来があったし、交易もされていたということではないかと思えます。

また、片山氏は沖縄で発見された港川人がその後の研究で縄文人と近くないとされたことから、縄文人南方起源説は了解事項でなく、日本人の二重構造論も雲行きが怪しくなるとしています。（片山 2015）

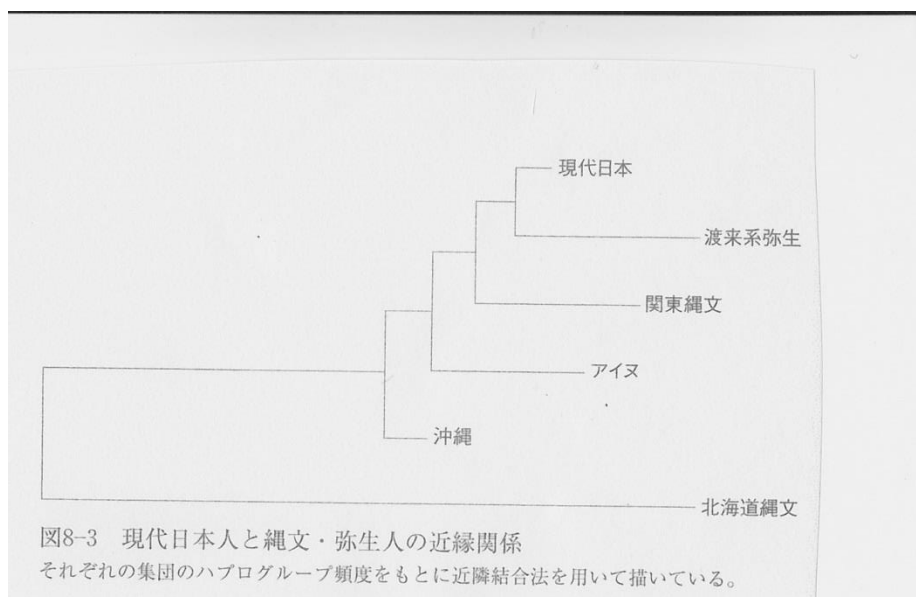
しかし、縄文人が南方起源でないとしても、それで埴原氏の理論が成り立たなくなるわけではありません。埴原氏のいわゆる二重構造論は現代人の頭蓋骨が南九州と東北では長頭、低顔、広鼻の人が多いのに対し北九州から近畿地方には短頭、高顔、狭鼻の人が多く居住し、さらに近畿から東に行くにしたがって長頭、低顔、広鼻の人が

増えていくというデータと、縄文時代から時代が現代に近くなるにしたがって、やはり頭蓋骨が長頭、低顔、広鼻から短頭、高顔、狭鼻へと徐々に変化しているというデータから出発しているのです。ですから縄文人のルーツが南方なのか北方なのかは基本的には埴原氏に結論を左右するものではありません。片山氏の批判は当たらないといえます。

「DNAも埴原説を支持」

またDNAの分析によって人類の歴史を探ろうとした篠田謙一氏は、ミトコンドリアDNAというDNAの分析から、次のような図を提示しています。

(図版 4) 篠田謙一 2007 より引用



これによると現代日本人は渡来系弥生人に近く、関東縄文人、アイヌ、現代沖縄人とだんだん関係が遠くなり、北海道縄文人との関係が最も遠いという結果になります。この図は埴原先生が頭蓋骨の分析から関係の近さを示した図とよく対応しているように思えます。

また日本人が持っているDNAの型でM7bといわれる型がありますがこの型を持つ人の割合は南日本から東日本にかけて徐々に低くなる傾向があるそうです。これ

は日本人の祖先に南方から渡来して東に広がっていった人たちがいたことを示していると言えそうです。南方からの渡来もあった可能性は否定できません。(篠田 2007)

また、埴原氏は周辺のアジア諸国の人々の頭蓋骨も研究し、現代の日本人やその祖先となったと思われる渡来系弥生人と現代の北方アジアの人々の頭蓋骨が近い関係にあるとしています。最新のDNAの研究から、弥生人の直接の子孫と考えられる現在の日本人のDNAは、北方アジアの人々のDNAに近いというのが一般的見解であるとされています。(松本秀雄 1992・篠田謙一 2007) これも頭蓋骨の研究による埴原氏の説とDNAの研究による篠田氏らの説が一致しているところで、埴原氏の説に説得力を与えていると言えます。

「渡来人は 100 万人以上だった可能性がある」

また片山氏は埴原氏が「弥生時代から古墳時代にかけて、100 万人以上もの人間が大陸側から渡来してきたのではないかと試算した」として、「そんな大規模な渡来人がいたとの仮説には、易々と乗れない」と言っています。(片山 2015)

その根拠として「弥生時代の渡来人の分布が北部九州や中国地方に限定され、せいぜい西日本に及ぶ程度だったからだ。それに、弥生時代の日本列島の人口は、たかだか 100 万人規模でしかなかったと推計されているからだ。いくらなんでも、一桁多いのではないかと懐疑する」というのですが、この意見にはいくつか問題があり、埴原氏に対する反論にはなっていないと思われます。たとえば、弥生時代の日本列島の人口ですが、片山氏が同じ資料の中に引用している小山修三氏による弥生時代の人口は中期で約 60 万人となっているので、100 万人という数字がどこから出たのか不明です。埴原氏の資料(埴原編 1993)を調べてみると確かに埴原氏は「紀元前 3 世紀～7 世紀までの千年間に数十万人から 100 万人以上が渡来したことになる」としています。そして、先にも引用しましたが、埴原氏が別の著書(埴原 1995)で下記のような試算をしていることが 100 万人の根拠となっていると思われます。

(表 8) 人口増加モデルによる縄文系・渡来系集団の推定人口

初期人口値 (人)	年増加率 (%)	縄文系 (人)	渡来系 (人)	全体 (人)
75800	0.2	560000	4839800	5399800
〃	0.3	1522485	3877315	〃
〃	0.4	4138540	1261260	〃
160300	0.2	1184466	4215334	〃
〃	0.3	3219712	2180088	〃

つまり、この試算は弥生時代の初め（縄文時代の晩期）の縄文人の末裔の自然増加を計算し、総人口から引くと、古墳時代には渡来系の人々の人口は少なく見積もっても120万人以上、場合によっては480万人以上であった可能性があるという試算です。ですから渡来した人々は数十万人か、場合によっては100万人を超えた可能性があるとしているわけで極めて説得力があるのです。片山氏は根拠を示さずに一桁多すぎると思われるとっていますが、埴原氏の試算は弥生時代から古墳時代までの試算であり、その試算は合理的で、渡来人が100万人以上だったと考えるに十分な根拠があると言えます。

「弥生人は稲作文化を持ってきた」

もう一つ、弥生人を考えるために重要なポイントがあります。それは佐賀県の菜畑遺跡、福岡県の板付遺跡など、弥生時代初期の稲作遺跡の研究によれば、日本列島の稲作文化が、当初から高度な技術のパッケージで導入されていることです。稲作はいろいろな技術が集約されて初めて成り立つ生産活動です。菜畑や板付で発掘された遺物、遺構を見れば、水田を耕作する鋤や鍬といった農具は、まだ鉄が使われていない時代から、現代の鋤鍬とほとんど変わらない形態に進化しています。水田に水を引き、

管理するために高度な灌漑施設が作られ、土木技術も発達していたことが分かります。刈り取った稲を保存するための貯蔵施設は、湿気を避ける意味からも、ネズミなどの害を避けるにも、高床式の倉庫が最適だったようで、これも早くから採用されています。こうした稲作にまつわる諸技術は、稲作の発展と同時に確立されていたものでありましょう。稲作の発祥の地と考えられている揚子江下流域で、それらの技術は培われたものと思われまます。

そして、日本列島に稲作が導入された時には、それらの関連技術はあるレベルまで完成し、そっくりパッケージで導入されているのです。これは、稲作をもたらした人々が、すでにそれらの高度な技術を身に着けた人々だったと考えるのが、最も素直な考え方だと思われまます。日本列島に稲作を導入した人々が、すでに高度な技術を身に着けていたとすれば、それは、その人々が日本列島以外のどこかでその技術を完成させた後に、日本列島に渡ってきたのだと考えるほかはありません。

この考え方に対し、もともと日本列島に住んでいた縄文人が、列島以外の人々から稲作技術を学んだのだと考える立場があります。しかし、この考え方に立った場合、だれが日本列島の縄文人に稲作技術を総合的に、いわばパッケージで教えたと考えるのでしょうか。日本列島にわたってきた弥生人が小規模に始めた水田耕作を、縄文人が見よう見まねで始められるほど稲作は簡単な技術には思えまません。もしそうだとすても、それなら、縄文人が稲作技術を習得するまでの試行錯誤の痕跡が遺跡から見つかってよきそうですが、菜畑遺跡や、板付遺跡などの、最も初期の稲作遺跡でさえ、すでに高度な技術レベルに達した水田遺跡しか見つかっていません。このことから、日本列島に稲作をもたらした弥生人は列島以外からの渡来人で、すでに高度に完成された稲作技術をパッケージで日本列島に持ち込んだ人々だったと考えるのが最も素直な考え方だと思われまます。

難民の作った国「邪馬台国」その2 —弥生人が渡来したのは半島の戦火を避けるた

めだった—

「弥生人が渡来した契機とは」

次に、弥生人がなぜ日本列島に渡来することになったのかを考えてみましょう。実はこの謎こそが日本人という民族が生まれる直接の要因であるのです。

大規模に人が移動を始めるきっかけとなると思われる要因はいくつか考えられます。たとえば、先にお話しした気候変動による食料の欠乏や、深刻な病気の蔓延、長期にわたる洪水や、干ばつ、あるいはイナゴなどの大群に襲われて農地を失うなど、人々が住み慣れた土地を捨てざるを得ない要因となるものはいろいろ考えられますが、朝鮮半島に住んでいたと思われる弥生人たちが、大挙してその地を捨て日本列島に渡来してきた要因は、この時代の東アジアがどういう状態であったかを考えるとその答えがわかると思います。

日本列島で発見された稲作の水田を伴った弥生遺跡の中で最も古いと考えられているのは、佐賀県唐津市にある菜畑遺跡です。この遺跡は水田の跡と、炭化したコメなどが発見されていますが、このコメの炭素同位体C14の研究からこの遺跡の古さが最近分かってきました。その時代は紀元前800年ころとされました。それまでは弥生人がコメ作りを始めたのは紀元前3世紀ごろというのが定説でしたので、炭素同位体C14の研究は弥生時代を一気に500年も古い時代に持って行ったことになります。この炭素同位体の測定結果には異論を唱える研究者もいて、そこまでは古くないとする説もありますが、少なくとも紀元前600年ころには、弥生人は日本列島で最初のコメ作りを始めていたと考えてよさそうです。(小山氏はC14の数値を採用して紀元前900年ごろとしています)

そして、先にも説明しましたが、この菜畑遺跡の水田や、同時に発見された稲作用の道具、貯蔵用の土器などはすでに高度に完成された体系を持っているのです。つまり菜畑遺跡を築いた人々は、たぶん、朝鮮半島から渡来した人だったと考えられるの

です。

では、紀元前 600 年～800 年ころとは東アジアでは何が起きていたのでしょうか。中国大陸ではちょうど春秋時代といわれる戦乱の時代に突入した時代でした。この時代に中国大陸が春秋時代という戦乱の世に入ったのは、先に述べた気候の寒冷化が原因と思われます。日本列島では気候の寒冷化によって縄文人が激減したのですが、中国大陸でもその影響は激烈でした。中国大陸では、気温の高い時代には、森林地帯が現在のモンゴルや中国の東北地方まで広がっていました。しかし、紀元前 1000～800 年ころ気温が低くなると、森林地帯だった地域は急速に草原に姿を変えてしまいました。そして、その森林地帯に住み、狩猟や牧畜をしていた人々は、草原となった土地に住めなくなり、南下を始めたものと思われます。南下した人々は、中国の黄河と揚子江に挟まれた、いわゆる中原に侵入しました。そこで以前より中原に国を建てていた周の人々と衝突することになりました。紛争が相次ぎ、弱い者は追いやられるか、死ぬしかない状況だったと考えられます。人々は生き延びるために強い者の下に団結し、その団結は中原各地に燕、魯、斉などの小国を生み出しました。そして、それらの国々の間に戦争が頻発する時代となったのです。これが春秋時代です。

この戦国の世には多くの戦死者が出たでしょうが、それ以上に多くの敗残兵と難民が生まれる結果となりました。それらの難民は中原を追われ、東へ、西へ、あるいは、南へ、北へと逃げのびたと思われます。東へ逃げのびた人々の一部は山東半島や朝鮮半島にたどり着きました。しかし、そこでも、それ以前から住んでいた人々と食料を巡って戦争が勃発することになったと思われるのです。そして、またそこで新たな敗残兵と難民が生み出されます。その人々は海を渡るほかはなかったと思われます。これが最初に北九州にわたってきた弥生人です。

「弥生人はどこから来たか」

弥生人が北方アジア起源の人々と考えられることは埴原氏の頭蓋骨の研究からも、篠

田氏のDNAの研究からも同じ結論が出ています。では彼らは北方アジアのどこから来た人々だったのでしょうか。埴原氏はおよそ次のように言っています。

「弥生人はおそらく中国北部の森林地帯に住み、やがて朝鮮半島に南下したツングース系の人々だった。その後、紀元前3世紀ごろに秦が滅亡してから弥生時代を通じて中国から多くの避難民や亡命者たちが古朝鮮に入ってきた。この間実に400年間にわたり朝鮮半島は動乱に明け暮れたので、その影響で朝鮮半島にいたツングース系の人々が弥生時代の日本列島に渡来した」（埴原 1995）

埴原氏は、中国北部が森林地帯だったころ、そこに住んでいたツングース系の人々が縄文末期に急速に気候が寒冷化したため南下し朝鮮半島に定住、その後、朝鮮半島の動乱によって一部が日本列島に渡来したと考えているようです。

一方、中国史の観点から岡田英弘氏は次のような見解を述べています。

「前5世紀に華南から北上して、山東半島の南側、亜熱帯性気候の北限の青島市に根拠地を作った越人はそこから黄海を航行して朝鮮半島に達し、その南端に故郷に似た環境の土地を発見して住みつき、さらに、条件の同じ日本列島にも移住して、海岸の低地を占領した。これが倭人の起源だろう」（岡田 1977）

岡田氏のいう倭人とは、後の日本列島人のことで、ここでは弥生人のことを言っています。また「越人」とは紀元前5世紀ごろ揚子江の河口付近にあった「越の国」の人を指しています。諺にある「呉越同舟」の越です。つまり、岡田氏は弥生人を「越人」の末裔だと考えているようです。

また、民俗学者の鳥越憲三郎氏は、倭人のルーツは中国の雲南地方だとする見解です。鳥越氏は神社の鳥居や注連縄の起源は雲南地方にあるとされ、次のような見解を述べています。

「注連縄や立石などの起こりは、倭族が稲作をともなって朝鮮半島南部に渡来した時の習俗を伝えるものといえよう。しかもそれは呉が越に破れた紀元前473年以後の習俗で、それ以前に遡ることができないことも留意しなければならない」（鳥越 1993）

鳥越氏は雲南から倭人が朝鮮半島に渡来し、その後に日本列島に渡来したと考えているようです。しかも朝鮮半島に渡来する契機となったのは紀元前5世紀の呉と越の戦争で、その戦争に敗れた呉の人々が朝鮮半島に渡来したとの見解です。

これらの見解の中で注目したいのは歴史学者の岡田氏と、民俗学者の鳥越氏が共に弥生人の故郷は中国南部に求めている点です。それは日本人の風習である、鳥居、注連縄、立石などと高床式の家屋、稲作などの文化は南方から渡来したものだと考えられるからです。一方、渡来系弥生人、現代日本人は頭蓋骨から見てもDNAから見ても北方系と考えられるのです。このように日本人がDNAは北方系、文化は南方系という矛盾したルーツを持っているのです。しかし、これらの先行研究の見解をまとめると、日本列島に渡来した弥生人は、北方系ツングースの人々で、朝鮮半島南部に住んでいた人々でしたが、その人々はすでに稲作技術を持ち、鳥居や注連縄など南方系の文化を担う人々だったと考えられます。その中でも有力な候補は紀元前5世紀に呉を滅ぼして華南に国を建てた越人の末裔だったか、呉越の戦争に敗れた呉の人々だったということになるのでしょうか。ということは、越人や、呉人はもともと中国の東北部や、モンゴルが森林地帯だったころ、そこに居住していたツングース系の人々の末裔であったということになります。その人々は紀元前1000年～800年頃に、気候の寒冷化が起きた時代に南下を始め、中原が春秋時代に突入した時代に揚子江の下流域に国を建てた人々でした。その後、呉越の戦争を経て、山東半島から朝鮮半島南部に移住してきた人々の一部が、さらに時代が下がってから日本列島にわたってきたのだと考えられます。

そして、この前提に立てば、弥生時代以降、日本の曙をになった人々は中国大陸の文化の担い手か、その影響下にあった人々であり、したがって、その言語、宗教、風俗は基本的に中国大陸の文化の影響を受けていたはずだということになると思います。(中国大陸といっても辺境ですが)そして、それらの中国大陸の文化の影響を受けていた人々が、日本列島にやってきたとき、彼らの文化を持ち込んできたことは疑

いようのないことでしょう。しかも先の考察からすると、その数はもともと日本列島に居住していた縄文文化の担い手の人々の数を大幅に上回るものでした。彼らが日本列島に定着していく過程で、もともと日本列島に居住していた縄文の人々の持っていた文化が一部取り入れられたことは間違いないでしょうが、圧倒的な人口比を考えると、弥生人の文化は基本的に列島以外から持ち込まれた、中国文化の強い影響下にあったものと見るべきだと思います。

「中国大陸、朝鮮半島の戦乱の時期に渡来が増加」

佐賀県唐津市の菜畑遺跡や、福岡県福岡市の板付遺跡などの、初期の稲作遺跡をつくった弥生人が渡来したのは、紀元前 800 年～600 年頃、中国が春秋時代に入ったころでしたが、大量の弥生人の渡来はもう少し遅れて始まったと思われます。

紀元前 5 世紀の終わりころ、中国は春秋時代から戦国時代へと入ります。その頃中国北部から遼東半島あたりを支配していた燕という国がありました。初めは小国でしたが、紀元前 4 世紀に昭王が出て燕は強勢となり、今の朝鮮半島に進出しました。その後、燕は山東半島付近に勢力を持っていた隣国、斉との抗争が続き、戦闘を繰り返していましたが、紀元前 222 年、燕は秦によって滅ぼされます。紀元前 3 世紀の後半、秦の始皇帝は戦国の世を争っていた国々を一気に征服し、紀元前 221 年に中国を統一しました。

燕が朝鮮半島に進出した紀元前 4 世紀と、燕が滅びた紀元前 3 世紀の後半には朝鮮半島は戦争が続く時代だったと考えられます。この時期に朝鮮半島の南部に住みついていた人々が、戦乱を逃れて居住地を捨て避難したものと思われます。この人々が逃げることができた場所は戦乱が激しい朝鮮半島の北部ではなく、海を渡った日本列島だったのだと考えられます。

その後、始皇帝の死とともに再び中国が混乱し、秦は滅び、紀元前 202 年に劉邦が前漢を建国しました。その頃、燕の将軍であった衛満という人が朝鮮に亡命し、燕や

齊から亡命してきた人々を糾合して衛氏朝鮮という国を建てました。しかし、紀元前2世紀の終わり、その衛氏朝鮮も前漢の武帝によって滅びてしまいます。その後、前漢は出先機関として、楽浪、玄菟、真番、臨屯という砦を置いて朝鮮半島の支配体制を敷きましたが、百年もたたない紀元前75年に楽浪郡のみを残してその他の砦は廃止されてしまいます。

このように、戦国時代（紀元前5世紀～）から始皇帝の秦の時代（紀元前221年～206年）そして、前漢の前半まで（紀元前2世紀初頭）は朝鮮半島では戦火が絶えることはなかったと考えられるのです。そして、戦争が始まるたび難民が発生し、その人々の一部は海を越えて日本列島に避難してきたことでしょう。これが弥生時代の渡来人の実態だったのではないかと考えます。ただし、弥生人はすべて朝鮮半島から渡ってきたとするのは事実と反していると思います。弥生人の中には中国の江南地方や、山東半島あるいは中国東北部などから直接日本列島にわたってきた人々もいたことは確かでしょう。なぜなら、それらの地域でも同時代は戦乱に明け暮れる時代であったからです。このように、弥生時代、朝鮮半島や中国本土の戦乱を逃れ難民と化した人々が日本列島に大挙してわたってきたのです。

このことは、渡来人が弥生時代を通じて、じわじわとやってきたのではないことを示唆しています。日本列島に渡来した難民は、朝鮮半島や中国大陸、特に沿岸部の戦火が激しくなる時期に大量に発生したでしょうから、その時期に渡来人口も増加したと考えるべきだと言えます。

「一方で大陸の人口が激減」

中原の戦火によって人口がどのように変動するのかを示した事例があります。紀元8年に前漢が滅び、王莽という前漢の官僚が新という国を建国しました。この国は建国と同時に北の匈奴の侵略を受け混乱に陥ります。国内では「赤眉の賊」といわれる内乱が勃発し混迷はますます深まりました。そして新は建国からわずか15年で滅び、

劉秀が建てた後漢にとってかわられます。この間に中原の人口がどうなったかについて前述の岡田氏はこう言っています。

「王莽の即位の直前の紀元 2 年に 5959 万 4978 人というピークを記録していたが、戦乱のための食糧不足で、王莽の在位中にすでにこれが半減した」（岡田 1977）

また時代は下がりますが、後漢末に 5600 万人だった人口が、後漢末の「黄巾の乱」などに始まる戦乱により、三国時代に入った時には 500 万人足らずに激減したとされています。（岡田 1994）このような人口の減少は、大量の殺戮や、飢饉、病気によって死亡した人が増加したことによるものであることは否めませんが、減少した人口のすべてが死亡したものとするのも現実的ではないと思われます。一部の人々は戦乱の地を逃れて周辺の地域に避難したと考えるのが妥当だと思われます。

古代の気温の研究によれば、弥生時代に一時温暖な気候に戻りましたが、古墳時代が始まるころから気温が低下し始め、そのために東アジアは戦乱に次ぐ戦乱の時代となってしまいました。紀元前 1 世紀末の前漢が滅亡し、紀元 1 世紀初頭に後漢が滅び、三国時代、魏、晋の王朝、五胡十六国時代を経て、6 世紀末から 7 世紀初頭の隋、唐王朝の建国による平和が訪れるまで、短期的には安定した時期があったものの、全体を通じてみれば、中国はどこかで戦争が起きている状態であったとってよいでしょう。そのたびに、難民や亡命者が大量に発生し、その一部は日本列島に渡来してきたと考えてよいと思います。その時代の日本列島は、弥生時代から古墳時代、飛鳥時代を経て天武王朝の成立、奈良時代へと移っていく、まさに日本国が誕生する時代でありました。この間、大陸から想像を絶する数の渡来人が、いろいろな契機でやってきたと考えられるのです。小山氏の推計に基づく計算では、その数は延べ 150 万人以上ということになります。

「断絶的変化の意味するもの」

もう一つ、渡来人の流入を想定しないと考えにくい現象についてお話ししましょう。

日本列島の古代史を概観したとき、西日本を統一した国家が奈良時代に成立するまでの間、何度か劇的といえる文化の断絶的変容が起きていることに気づきます。それは

(1) 石器と縄文式土器、原始的焼き畑農業と狩猟、採集の時代であった縄文時代から、青銅器、鉄器などの金属器を持ち、水稻耕作技術と、シンプルですが機能的で、おそらく大量生産に適した弥生式土器を持った弥生時代への変化。

(2) 小規模の水田灌漑技術の弥生時代から、巨大な前方後円墳をも作れる大規模で高度な土木技術を持ち、須恵器、土師器といった高度な焼き物を作れた古墳時代への移行。

(3) 馬具の出現。

(4) 掘立柱の建物から、巨大な伽藍建築への進化。

これら、古代の日本列島の西部で起きた文化の変革は瞠目に値するものといえましょう。

これらの変化は、当時の日本列島の住民が、大陸や朝鮮半島の文化を次々と学び、受け入れてきたためと通常は考えられています。果たしてそうでしょうか。そう考えるには、これらの文化の変貌はあまりに突然の様変わりに見えるのですがどうでしょうか。これらの変革は、日本列島人が大陸や朝鮮半島の文化を学び受け入れたと考えるより、文化の担い手だった人々が交代したためだったと考えるほうが自然なのではないかと思えます。先に見てきたように、縄文時代から弥生時代へ、弥生時代から古墳時代へ、さらに奈良時代へと移行する過程で、自然に増加しただけとは考えられないほどの人口の増加が起きているのです。これは大陸や、朝鮮半島から渡来した人々が、それまでの住人より圧倒的に多数であったためとしか考えられません。そうだとすれば、その人々が担っていた文化が新たに日本列島に持ち込まれ、それまでの人々が担っていた文化を駆逐したのは必然というほかないでしょう。

この状況を想定することは、日本列島の古代史の基本的なシナリオが、中国大陸や朝鮮半島の戦火を逃れた人々が波状的にわたってきて、それ以前に日本列島に住みつ

いていた人々を征服し、あるいは同化しながら列島各地へ拡散していった過程と捉えることとなります。そのシナリオが成り立つのか、次の章から詳しく考察してみましよう。

参考文献

- 石原道博編訳 「魏志倭人伝他三篇」 岩波文庫 1951
安本美典 「邪馬台国ハンドブック」 1987
安本美典 「邪馬台国人口論」 柏書房 1991
安本美典 「卑弥呼は日本語を話したか」 PHP研究所 1991
安本美典 「最新邪馬台国論争」 産能大学出版部 1997
岡田英弘 「倭国の時代」 文芸春秋社 1976
岡田英弘 「倭国」 中公新書 1977
岡田英弘 「日本史の誕生」 弓立社 1994
埴原和郎 「日本の古代5 前方後円墳の世紀」 中央公論社 1986
埴原和郎 「日本人の成り立ち」 人文書院 1995
埴原和郎 「日本人と日本文化の形成」 朝倉書店 1996
埴原和郎 「日本人の誕生」 吉川弘文館 1996
小山修三 「縄文時代」 中公新書 1984
小山修三 岡田康博 「縄文時代の商人たち」 洋泉社 2000
篠田謙一 「日本人になった祖先たち」 NHKブックス 2007
松本秀雄 「日本人は何処から来たか」 NHKブックス 1992
鳥越健三郎 「古代朝鮮と倭族」 中公新書 1993
安田喜憲 「気候が文明を変える」 岩波書店 1993
片山一道 「骨が語る日本人の歴史」 ちくま新書 2015
鬼頭宏 「人口から読む日本の歴史」 講談社学術文庫 2000